

## 【小説部門・佳作賞】

### 滝ちゃんの恋は多様性

兵庫県立伊川谷北高等学校 3学年 斎藤 里穂

二〇XX年。世は大多様性時代。

もちろんジェンダーレスも多様性の一つである。

この時代の学校では男女関係なくスカートやズボンが選べる。男女で分けられることはあっても差別されることは一切なく、女性であると聞かされるまで男の子だと思って話していたなんてこともよくある。聞かされたところで、驚くようなことでもなく、そうだったのだねと言ってまた話に戻るような時代。様々な種類の人が存在する中で、互いを違和感なく認め合える時代となっていたのである。

そんな時代に生きる高校三年生の桜は今、教室で親友の滝ちゃんに髪を結ってもらいうながら滝ちゃんの恋バナに付き合っていた。高校でクラスが一緒になったことはなかったが、田舎の同じ中学校出身で、一緒にこの東京の高校へ入学するほど仲の良い、かけがえのない唯一の親友である。

「そのときね、赤木様ったらアタシに笑いかけてくれてもうキュンってさア」

滝ちゃんの話す様子があまりにも幸せそうで、それは桜も嬉しくさせた。どうやらお相手は赤木様というらしい。だが、超マンモス校在学中ゆえに、桜は赤木という名の生徒がいることすら今初めて知った。赤木様とやらがどのような人物なのか、聞きたいことは山々だが一番気になるのが、赤木様という人物が男子なのか女子なのである。多様性といつても流石に同性愛はまだ一般的ではないため、大体女子の恋する相手は男子という体で話が進むのだが、滝ちゃん相手にそうはいかない。

というのも、滝ちゃんが男であるからだ。話し方から察せられる通り、いわゆるオネエに近いものがある。今時この単語は古いのだが仕方がない。彼、いやこの人はオネエ過ぎるのだから。女子の味方で男子の味方。誰とでも話せるコミュ力お化けで姉御肌。髪を結うのも上手。おまけになかなか美しい顔立ち。日本が産んだオネエの集大成的存在である。

「オネエは男性がすきだからオネエといわれるのだろ」と考えたそこのあなた。その考えは甘い。おまけに古い。滝ちゃんは、男子と女性を対象にした恋バナでも存分に盛り上がっててくれる、最高に楽しい人なのだ。桜もこんなに素敵な親友の恋を応援しないわけにはいかないのだが、正直滝ちゃんの恋愛対象は男女どちらでもありのような気がする。というかどちら寄りかも分からぬ。しかし今ここで勢いに任せて赤木という人物の性別を聞いてしまうのはよくない。オネエという存在は計り知れないのだ。

もしかすると、滝ちゃんの中ではしっかりと恋愛対象が決まっていて、この質問によって、滝ちゃんは自身の美学を汚されたような気持ちになり、不快な思いをさせかねない、そう考えた桜はこみ上げてくるその質問を飲み込んでメモ帳を取り出す。

「えっと、赤木様……は、どんなお顔をしているの」

特徴を聞けば性別なんてすぐわかる。そう思って一つの質問をすると、十の答えが返ってきた。そのやり取りをしばらくした後、桜は、訳のわからなくなってしまったメモ用紙を見つめていた。ふと窓の外を見るともうすっかり日は沈んでいた。メモ用紙に綴られた、随分と誇張されたような内容に、桜の脳内が整理されることはなかった。桜は窓を開けて、夜の冷たい風に、結ってもらったツインテールを揺らしながら小さく息を吐いた。

(赤木様は神様かなにかなのかな……)

だがここまで来ではもう引き下がれない。自力で確かめるしかない、と桜はぎっしり書かれたメモの中から赤木のクラス情報を探し出し、翌日赤木のいる三年二十一組へ向かった。

(くっ……一体何クラスあるの、この学校は！)

階段を上り終え、ようやく二十一組を覗き込んだ。この学校に二年半通っているのに顔見知りはほんのわずか、いやもう言ってしまえばそのクラスには誰一人として知り合いはない。未知の空間に恐る恐る足を踏み入れ座席表を吟味する。

「……あ、あった！」

窓際にある赤木の席の方を見る。

そこに座って読書をしていたのは、透けているのではないかと思うほどの透明感のある真っ白な肌に、窓からさす光の加減で黄色にも紫にも光るような鮮やかな長めの黒髪ショートカットと、深いのに太陽の光が差し込む海を思わせるマリンブルーの瞳をもった、とてもなく美しい人であった。すこし開いた窓からの優しい風に吹かれる長い前髪の間に見える表情は、なんだか悲しそうで、それがまた、桜の開いた口を塞がらなくさせていた。

数十秒してようやく己の目的を思い出し我に返った桜は、赤木様の特徴を改めて確認する。滝ちゃんが言っていた通りの容姿であった。誇張されていると思っていた滝ちゃんの証言も、赤木様を実際に目の前にしては、納得せざるを得ない。この人が赤木様で間違いないようだ。

(でもほらやっぱり、実際に見たら性別なんてすぐ分か)

分からぬ。美少女にも見えるし美男子にも見える。もう直接聞いてしまおう、と、汗ばんだ己の手をぐっと握り占めるとその熱意溢れる視線を感じ取ったのか、赤木様が顔を上げ、桜と目が合った。あまりの美しさの不意打ちに、目が合った瞬間反射のように足が回れ左をして走り出してしまった。そうして教室を出ようとした桜だったがドアの段差につまずいて顔から思いっきりこけてしまった。目が合ったら急に自分のぼさぼさの髪やら荒れ

たお肌やらが恥ずかしくなって教室を出ようとしたというのに、更に醜態までもさらしてしまった。

次第に顔が熱くなり足に力が入らず起き上がれない状態に、桜は中学生時代にも似たような事があったのを思い出した。

桜が通っていた中学校は場所がかなりの田舎ということもあり、容姿や性格が原因で軽いいじめや喧嘩が起こることも少なからずあるような学校だった。

それは入学式の日の出来事だった。

普通とは違って派手で可愛い服装を好んでいた桜に対して、批判的な感情を抱いたクラスメイトが桜のスカートを引っ張った。その時も桜はバランスを崩して無様な倒れ方をしてしまった。

入学早々、この仕打ちは十二歳の桜には耐え難く、起き上がろうとしても足に力が入らなかつた。

けれどその時、手を差し伸べてくれた男の子がいた。

「そのスカート、とっても素敵よ？」

そう言って桜に笑いかけてくれた。

それが滝ちゃんとの出会いだった。

(私はそんな優しい滝ちゃんの手助けがしたくて )

胸がじわりと温かくなる滝ちゃんとの出会いを思い出すと自然と立ち上がっていた。

「うわ、なにしてるのあのコ」

クスクスと、二十一組の人達の笑い声が聞こえてきて、桜は悲惨な状況にある現実に引き戻された。

(うう！ やっぱり恥ずかしい！)

周りの冷笑をBGMに、桜は火が出そうな顔を覆い隠しながら小走りで二十一組を後にした。

そんなことがあり、再び二十一組へ来たのは一週間後だった。まだ目的の赤木様の性別を知ることを達成出来ていない。深呼吸をして二十一組を覗き込む。赤木様は今日もその可憐な瞳の視線を本に注いでいた。

(よし、搜索開始)

桜は赤木がどっちのトイレに入っていくかを確認しようと毎休み時間二十一組へ通った。

しかし赤木はトイレに行かない。というか、二十一組に制服のスカートを靡かせながら猛ダッシュで向かっても、到着した途端にまた猛ダッシュで自分のクラスへ帰らなければな

らなかった。そうしないと次の授業に間に合わないという悲劇が桜を襲っていたのだ。結局赤木様を押すことすらできなかつたのである。そんな日が一週間ほど続いていたが、得られた成果と言えば、体重マイナス四キロのダイエットに成功したことくらいだった。

「桜？ さーくーらア」

滝ちゃんの声にはっとして桜は、今が昼休みの真っ最中だったことを思い出す。

「できたわよオ？ ツインテール♡」

「ごめん、ありがと。ボ一っとしてた」

マイナス四キロの激減なだけあって、桜は少々やつれ気味で、疲れを隠せていなかつた。

「なんかアンタ、最近忙しそうよねエ？ せっかく久々に一緒にお昼食べられるっていうのに、元気ないじやない？ なにかあったのオ？ 悩みがあるなら話してよオ」

滝ちゃんの、いつも通りの変わらない優しさに、桜は目頭を熱くした。同時に滝ちゃんのその言葉は、桜の気合を入れ直す栄養剤にもなつた。

「滝ちゃん、私頑張るからね！」

滝ちゃんの恋を応援しようと意気込んでいながらまだスタートラインにも立てていなかつたので、桜は食べかけのお弁当をしまって、ツインテールを揺らしながら勢いよく教室から飛び出していった。

悩みを聞こうとしただけなのに独り残されてしまった滝ちゃんだったが、元気を取り戻した桜を見て、思わず笑みがこぼれたのだった。そして自身のポケットから、ハートのシールが張られた手紙を取り出した。その手紙を見詰めながら、ゆっくりと深呼吸をする。

「よし……。アタシも頑張ばらなきや……」

「うおおおおおおおお！」

桜は滝ちゃんと別れた後、お弁当を持って、二十一組へ猛ダッシュしていた。

(力がみなぎる……！ 待ってなさい赤木様あ！)

すると突然後ろから声をかけられた。

「桜殿、そんなに走つたら転ぶでござる」

おっとっと。と、聞き覚えのある語尾に桜は足を止めて振り返った。

「！？ 久しぶり、忍者丸君！」

そこに立っていた、正確に言うとそこの天井に立っていたのは、紺色の忍者服を着ている青年。自称忍者の忍者丸君であった。忍者丸君と桜は高校二年生の時におなじクラスで割と仲の良かった友達だ。

「半年ぶりぐらいだね！ 相変わらず制服じやないんだ！」

「そんなことより、ツインテールかわ、じやなくて！ なぜそんなに急いでいるでござる。桜殿のためであれば拙者、何か手伝うでござる」

「ほんと！？ じやあ、赤木様って人知ってる？」

「赤木殿なら拙者の隣のクラスでござる。何度か話したことはあるでござるよ」

「え！？ それなら……」

と、赤木様の性別を聞こうとした瞬間、予鈴が鳴ってしまった。

「あ、すまないでござる桜殿！ 拙者この後体育であるからして、また話そうでござる」

忍者丸君はそう言って桜の目の前から謎の煙と共に一瞬で姿を消してしまった。

しかし、何としてでもこの絶好の機会を逃したくない桜は、授業を終えてすぐ、忍者丸君が着替えているであろう男子更衣室へ向かった。

さすがに、更衣室のすぐ前で忍者丸君を待つのは気が引けたので、少し離れて待つことにした。しばらく更衣室の人の出入りを見詰めていたが、忍者丸君は出てこない。

(忍者丸君、あの服着替えるの時間かかりそうだしな……)

そう考えた瞬間、向こうの方に赤木様の姿を見つけた。赤木様は桜が眺めている更衣室の方向に歩いていた。そしてなんと、腕には体操服を抱えていた。

(待って待ってまさかまさかまさか！？)

そう、赤木様はそのまま、男子更衣室へ入っていった。

「うわあい！ 男性でしたかー！！」

桜はずっと追及していた性別を知ることができた喜びと達成感の衝動に駆られて、奇声を発しながら赤木様の後を追った。すると

「桜殿？！」「さくらア？！」

と、忍者丸君と滝ちゃんが同時に声をあげた。

「え、あ、た、滝ちゃん？！」

(滝ちゃん私より先にここ来てたの。足早くない?)

そんな桜の動揺も忍者丸君と滝ちゃんの動揺具合に比べると冷静に見えるくらいだった。桜は二人を落ち着かせようとした時、滝ちゃんの手に握りしめられた手紙に気づいた。

(これは……、ラブレター！)

滝ちゃんが今まさに告白しようとしていたことを察すると、ついテンションが上がってしまった桜は、こぼれる笑みを隠せなかった。

「私のことはいいから滝ちゃん、ほら、それ読むんでしょ。ふふっ」

「え待って桜、えええ？」

「もーじれったい！ 速く！！ 想いぶつけて！！」

桜の勢いに圧倒されて滝ちゃんは動揺しながらも手紙を読み始める。

「えーっと、今日は伝えたいことがあってきました……」

語りかけられている当の本人である赤木様は状況が理解できず、目が泳いでいる。

「うんうん。いいよお滝ちゃん！ 一応ここ更衣室だけどね！」

困惑する赤木様にはお構いなく、桜は滝ちゃんの告白に合いの手をいれる。

「アタシはずっと、赤木権三郎君、あなたのことを……」  
「ごんざぶろう君？！ 意外といかつい名前だね！」  
桜のキレのいい合いの手は止まらない。  
「いやいやいや！ 待つでござる！」  
見かねた忍者丸君がさすがに止めに入ってきた。  
「滝川君の手紙の内容、全く赤木君に伝わってないと思うでござるが？！ しかも桜殿、ここ  
男子更衣室でござるよ！」  
滝ちゃんがその言葉に勢いよく頷く。  
「桜みたいなプリティガールが何でここにいるのよオ！」  
そう言って外へ連れ出そうとする滝ちゃんをキヨトンとした顔で桜は見た。

「へ？ やだな二人とも、私男だよ？ ほら続けて続けて」  
桜のツインテールがいたずらに揺れた。

六年間共に過ごした親友の性別を間違えていた滝ちゃんと、思いを寄せていた女性が実は男性だった忍者丸君。そして状況の理解が出来ないごんざぶろう。唖然とする三人。  
中でも滝ちゃんは、今にも目が飛び出しそうなほど桜を凝視している。  
桜の瞳に映るそんな光景も、よくある日常の一ページに過ぎない。

だってそう、世は大多様性時代なのだから。